

論 文 審 査 の 要 旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 学 術 ）	氏名	呉憲占
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
20世紀転換期ハワイ華僑社会の政治活動に関する研究			
論文審査担当者			
主 査	教授	水羽信男	印
審査委員	教授	長田浩彰	印
審査委員	教授	丸田孝志	印
審査委員	准教授	福田 恵	印
〔論文審査の要旨〕			
<p>呉憲占の論文は、次の6つの章で構成されている。序章、第1章『清議報』に見る清末の華僑社会」、第2章「梁啓超のハワイ訪問をめぐる一考察：「名は保皇、実は革命」という通説の検討を兼ねて」、第3章「清末維新派の海外亡命と華僑社会：ホノルル保皇会の設立とその法人化に注目して」、第4章「清末華僑の政治活動に関する一考察：ホノルル保皇会（1900—1903）を中心に」、終章。</p> <p>従来の中国近代史研究、とくに清朝末期から中華民国初期にかけての辛亥革命時期（19世紀末から20世紀初め）の研究では、中国大陸における孫文ら清朝打倒を掲げる革命派と、立憲君主制を求める梁啓超ら維新派の対抗関係が基軸として考察されてきた。華僑についても、こうした視角から革命派と立憲派のいずれが華僑社会を掌握しえたのか、ということ論じがちだった。</p> <p>呉憲占はこうした研究姿勢を批判し、華僑の側の主体性を軸とし、中国近代史を海外の中国人社会との連携から問い直すという新たな視座の確立を目指した。具体的には中国近代史の重要な転換期のひとつである20世紀転換期に着目し、地域としては立憲派と革命派の華僑争奪の場となり、また米国との関係から世界史的な問題群にアプローチしえる場所として、ハワイ・ホノルルの華僑社会をとりあげた。また史料的には横浜で発行された『清議報』など中国語雑誌だけでなく、ハワイで米国人が発行した英字新聞や中米間の外交文書なども使用し、これまでの研究では十分に活用されてこなかった新史料も発掘しえたといえる。</p> <p>呉憲占の論文については、予備審査において、①研究動向整理の部分をさらに充実させ、かつ分かり易くすること、②論文のキーワードである「主体性」の意味することについて明らかにすること、③保皇派・保皇会・維新派など用語法について正確を期すこと、④華僑社会の内部編成についてさらに分析すること等の必要性が指摘された。今回の論文では上記の点は基本的には解決されたといえる。</p> <p>本論文で呉憲占は、ホノルル華僑がホスト社会に受け入れられ、自らの生活を守り発展させるために、社会組織をつくり母国の変革に期待をかけたのであり、そのために維新派を支持したことを明らかにした。またホノルル華僑が米国政府を利用して自らの権益を守ろうとしたことが、中国社会に近代法を定着させてゆくひとつの契機になったことも指摘した。さらに梁啓</p>			

超とホノルルの華僑社会に関する今日一般的に流布している通説（梁啓超が自分たちの本当の目的は革命だとデマをとばし、保皇会の組織を拡大したという言説）が、中華民国成立以後の孫文に対する神話化のプロセスで作上げられて来たことを具体的に示し、歴史の見直しの必要性を提起するなど、学界に新たな知見を加えた。

呉憲占の論文に対しては使用した史料の性格や、ホノルル華僑社会の流動性の具体像などについて質問がなされた。また華僑社会内部の政治的な編成についても問われた。これらの質問に対して、呉憲占は的確に対応した。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。